

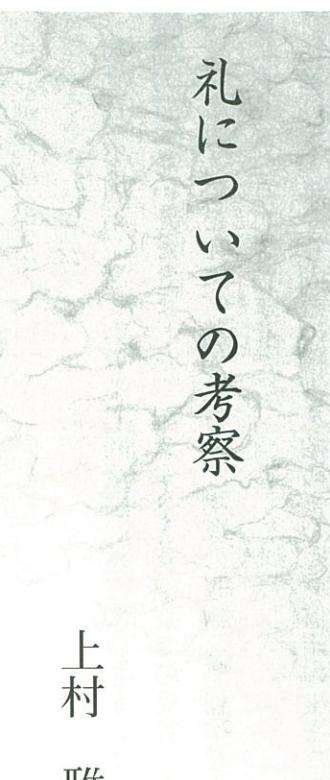
礼についての考察

上村 雅彦

何故抜くのか。

どの場面で納めるのか。

始まり方と終わり方を間違うと闘いが和合となるか、遺恨として残るものが違ってきます。



これが国家間の戦争で例えますと、最終は国同士が和平し終戦となります。そうでなければ遺恨を残し、酷くなればテロリストが闇討ちのような報復措置を企てる事となりかねないでしょう。

創立百二十周年記念『第五十三回全国武徳祭』が盛大に、且つ事故もなく無事終了出来ましたことを大変嬉しく喜びを感じます。

武徳祭の運営に多大なる御尽力頂きました先生方に心から御礼申し上げます。

またこの大切な行事に私めに「実行副委員長」のお役をいただきましたにもかかわらず、数々の至らぬ点を残してしまいましたこと、深くお詫び申し上げます。

今回の全国武徳祭におきまして各団体先生方の素晴らしい演武を拝見し、厳しい鍛錬のもとに達せられる妙技に改めて大変感動致しました。また、技の素晴らしさとともに本当はとても大切な事であるにもかかわらず他所では見受けられなくなってきた素晴らしい『礼』の所作を拝見しました。

改めて『大日本武徳会』の本来武道家として忘れてはならない本質を演じていらっしゃいます先生方の素晴らしさに私も誇りを感じました。

「武は 礼 に始まり 礼 に終わる」

と云われますが、何故礼なのでしょうか。
剣においての実戦の場合、刀に例えますと鞘からの抜き方と納め方が大切だと考えられます。

以前、あるテレビ番組の企画で外国の武道家が紹介されました。その方は毎年、二回ほど日本に来られて薙刀を稽古され、自国の道場において日本で修練された薙刀を指導されているとの事でした。インタビューされている方が最後に「薙刀のどこに魅力があるので」と問われますと、「試合の最初と最後だけを見ていて、どちらが勝ったのか負けたのが判らない。そこに魅力を感じます」とお答えになられました。見ていた私は、道を逆に教わったような気持ちにさせられました。

勝つて傲るわけでもなく、負けて悔やむわけでもない、相手に対する礼儀を尽くすことが、我々日本の武道家が示すべき態度であり、「一般社団法人 大日本武徳会」先生方の素晴らしい『礼』が今後も世界中の武道を志す人々の良き指針となり続けますことを考えられます。